

心中

森鷗外

青空文庫

お金^{きん}がどの客にも一度はきつとする話であつた。どうかして間違つて二度話し掛けて、その客に「ひゆうひゆうと云うのだろう」なんぞと、先^{せん}を越して云われようものなら、お金の悔やしがりようは一通りではない。なぜと云うに、あの女は一度来た客を忘れると云うことはないと云つて、ひどく自分の記憶^{たの}を恃んでいたからである。

それを客の方から頼んで二度話して貰つたものは、恐らくは僕一人であろう。それは好く聞いて覚えて置いて、いつか書こうと思つたからである。

お金^{きん}はあの頃いくつ位だつたかしら。「おばさん、今晚は」なんと云うと、「まあ、あんまり可哀そうじゃありませんか」と真面目に云つて、救を求めるように一座を見渡したものだ。「おい、万年新造^{しんぞ}」と云うと、「でも新造だけは難^{ありがた}有いわねえ」と云つて、心^{しん}から嬉しいのを隠し切れなかつたようである。とにかく三十は慥^{たし}かに越していた。

僕は思い出しても可笑^{おか}しくなる。お金は妙な癖のある奴だつた。妙な癖だとは思ひながら、あいつのいないところで、その癖をはつきり思い浮かべて見ようとしても、どうも分からなかつた。しかし度々見るうちに、僕はとうとう覚えてしまった。お金を知っている人は沢山あるが、こんな事をはつきり覚えているのは、これも矢つ張僕一人かも知れない。

癖と云うのはこうである。

お金は客の前へ出ると、なんだか一寸ちよつと坐わつても直ぐに又立たなくてはならないと云うような、落ち着かない坐わりようをする。それが随分長く坐わっている時でもそうである。そしてその客の親疎によつて、「あなた大層お見限りで」とか、「どうなすつたの、馳いたちの道はひどいわ」とか云いながら、左の手で右の袂たもとを撮んで前に投げ出す。その手を吮のびの下に持つて行つて襟えりを直す。直すかと思つと、その手を下へ引くのだが、その引きようが面白い。手が下まで下りて来る途中で、左の乳房を押えるような運動をする。さて下りたかと思つと、その手が直ぐに又上がつて、手の甲が上になつて、鼻の下を右から左へ横に通とり掛かつて、途中で留まつて、口を掩おほうような恰好になる。手もつとをこつと云う位置に置いて、いつでも何かしやべり続けるのである。尤も乳房もつとを押えるような運動は、折々右の手ですることもある。その時は押えられるのが右の乳房である。

僕はお金が話したまをそつくりここに書こうと思つ。頃このごろ日僕このごろの書く物の総ては、神聖なる評論壇が、「上手な落語のようだ」と云う紋切形の一言で褒ほめてくれることになつているが、若もし今度も同じマンシオン・オノレエルを頂戴したら、それをそつくりお金にお祝儀に遣れば好いいことになる。

話は川榭かわますと云う料理店での出来事である。但しこの料理店の名は遠慮して、わざと嘘の名を書いたのだから、そのお積りに願いたい。

そこで川榭には、この話のあつた頃、女中が十四五人いた。それが二十畳敷の二階に、目刺めざしを並べたように寝ることになつていた。まだ七十近い先代の主人が生きていて、隠居しごと為事にと云うわけでもあるまいが、毎朝五時が打つと二階へ上がつて来て、寝ている女中の布団を片端かたっぱしからまくつて歩いた。朝起は勤勉の第一要件である。お爺いさんのする事は至つて殊勝なようであるが、女中達は一向敬服していなかった。そればかりではない。女中達はお爺いさんを、蔭で助兵衛すけべえし爺さんと呼んでいた。これはお爺いさんが為めにする所あつて布団をまくるのだと思つて附けた渾名あだなである。そしてそれが全くの冤罪えんざいでもなかつたらしい。

暮に押し詰まつて、毎晩のように忘年会の大一座があつて、女中達は目の廻るように忙せわしい頃の事であつた。或る晩例の目刺びきの一疋になつて寝ているお金が、夜なかにふいと目

* * *

を醒さました。外の女ならこんな時手水ちようずにでも起きるのだが、お金は小用の遠い性たちで、寒い晩でも十二時過ぎに手水に行つて寝ると、夜の明けるまで行かずに済みますのである。お金はぼんやりして、広間の真中に吊るしてある電灯を見ていた。女中達は皆好く寐ねている様子で、所々で歯ぎしりの音がする。

その晩は雪の夜であった。寝る前に手水に行つた時には綿をちぎつたような、大きい雪が盛んに降つて、手水鉢ちようずばちの向うの南天と竹柏なぎの木とにだいぶ積つて、竹柏の木の方は飲み過ぎたお客のように、よろけて倒れそうになつていた。お金はまだ降つているかしらと思つて、耳を澄まして聞いているが、折々風がごうと鳴つて、庭木の枝に積もつた雪のなだれ落ちる音らしい音がする外には、只方々の戸がことごと震うように鳴るばかりで、まだ降つているのだから、もう歇やんでいるのだから分らない。

暫くすると、お金の右隣に寝ている女中が、むっくり銀杏いちようがえ返し返しの頭を擡もたげて、お金と目を見合わせた。お松と云つて、瘦やせた、色の浅黒い、氣丈な女で、年は十九だと云つているが、その頃二十五になつていたお金が、自分より精々二つ位しか若くはないと思つていたと云うのである。

「あら。お金さん。目が醒めているの。わたしだいぶ寐たようだわ。もう何時。」

「そうさね。わたしも目が醒めてから、まだ時計は聞かないが、二時頃だろうと思うわ。」
 「そうでしょうねえ。わたし一時間は慥かに寝たようだから。寝る前程寒くないことね。」
 「宵のうち寒かったのは、雪が降り出す前だったからだよ。降っている間は寒くないのさ。」

「そうかしら。どれ憚りに行つて来よう。お金さん付き合わなくつて。」

「寒くないと云つたつて、矢つ張寝ている方が勝手だわ。」

「友達甲斐のない人ね。そんなら為方がないから一人で行くわ。」

お松は夜着の中から滑り出て、鬆んだ細帯を締め直しながら、梯子段の方へ歩き出した。

二階の上がり口は長方形の間の、お松やお金の寝ている方角と反対の方角に附いているので、二列に頭を衝き合せて寝ている大勢の間を、お松は通つて行かなくてはならない。

お松が電灯の下がっている下の処まで歩いて行つたとき、風がごうと鳴つて、だだだあ
 と云う音がした。雪のなだれ落ちた音である。多分庭の真ん中の立石の傍にある大きい
 松の木の雪が落ちたのだろう。お松は覚えず一寸立ち留まつた。

この時突然お松の立っている処と、上がり口との中途あたりで、「お松さん、待つて頂戴、一しよに行くから」と叫ぶように云つた女中がある。

そう云う声と共に、むつくり島田鬻しまだまげを擡げたのは、新参のお花と云う、色の白い、髪ちぢのれた、おかめのような顔の、十六七の娘である。

「来るなら、早くおし。」お松は寝巻の前を搔き合せながら一足進んで、お花の方へ向いた。

「わたしこわいから我慢しようかと思つていたんだけど、お松さんと一しよなら、矢つ張行つた方が好いわ。」こう云いながら、お花は半身起き上がつて、ぐずぐずしている。

「早くおしよ。何をしているの。」

「わたし脱いで寝た足袋を穿はいているの。」

「じれつたいねえ。」お松は足踏をした。

「もう穿けてよ。勘辨して頂戴、ね。」お花はしどけない風をして、お松に附いて梯子を降りて行つた。

便所は女中達の寝る二階からは、生憎あいにく遠い処にある。梯子を降りてから、長い、狭い廊下を通つて行く。その行き留まりにあるのである。廊下の横手には、お客を通す八畳の間が両側に二つずつ並んでいてそのはずれの処と便所との間が、右の方は女竹めだけが二三十本立っている下に、小さい石燈籠いしどうろうの据えてある小庭になつていて、左の方に茶室まが賽いの四

畳半があるのである。

いつも夜なかに小用に行く女中は、竹のさらさらと摩れ合う音をこわがったり、石の石燈籠を、白い着物を着た人がしゃがんでいように見えると云ってこわがったりする。或る時又用を足している間じゆう、四畳半の中で、女の泣いている声でしたので、帰りに障子を開けて見たが、人はいなかったと云ったものがある。これは友達をこわがらせるために、造り事を言ったのであるが、その話を聞いてからは、便所の往き返りに、とかく四畳半が気になってならないのである。殊に可笑しいのは、その造り事を言った本人が、それを言ってから四畳半がこわくなって、とうとう一度は四畳半の中で、本当に泣声がしたように思つて、便所の帰りに大声を出して人を呼んだことがあつたのである。

* * *

お金は二人が小用に立つた跡で、今まで気の附かなかつた事に気が附いた。それはお花の空床の隣が矢張空床になつてゐることであつた。二つ並んで明いてゐるので、目立つたのである。

そして、「ああお蝶さんがまだ寝ていないが、どうしたのだろう」と思った。お花の隣の空床の主はお蝶と云つて、今年の夏田舎から初奉公に出た、十七になる娘である。お蝶は下野しもつけの結城ゆうきで機屋をして、困らずに暮しているもの一人娘であるが、婿を嫌つて逃げ出して来たと云うことであつた。間もなく親元から連れ戻しに親類が出たが、強情を張つて帰らない。親類も川俣の店が、料理店ではあつても、堅い店だと云うことを呑み込んで、とうとう娘の身の上をこの内のお上さんに頼んで置いて帰つてしまつた。それが帰ると、又間もなく親類だと云つて、お蝶を尋ねて来た男がある。十八九ばかりの書生風の男で、浴帷子ゆかたに小倉袴こくらばかまを穿いて、麦藁帽子むぎわらを被つて来たのを、女中達のぞが覗いて見て、高麗蔵まぞうのした「魔風恋風まかせ」の東吾とうごに似た書生さんだと云つて騒いだ。それから寄つてたかつてお蝶を揶揄つたところが、おとなしいことはおとなしくても、意気地のある、張りの強いお蝶は、佐野と云うその書生さんの身の上を、さっぱりと友達に打ち明けた。佐野さんは親が坊さんにすると云つて、例の殺生石せつしょうせきの伝説で名高い、源翁げんおう禪師を開基としてゐる安穩寺あんおんじに預けて置くと、お蝶が見初めて、いろいろにして近附いて、最初は容易に聴かなかつたのを納得させた。婿を嫌つたのは、佐野さんがあるからの事であつた。安穩寺の住職は東京で新しい教育を受けた、物分りの好い人なので、佐野さんの人柄を見て、

うるさく品行を非難するような事をせず、「君は僧侶そうりよになる柄の人ではないから、今のうちに廃よし給え」と云つて、寺を何がなしに逐おい出してしまった。そこで佐野さんは、内情を知らない親達が、住職の難癖を附けずに出家を止めるのを聞いて、げにもと思つたらしいのに勢を得て、お蝶より先きに東京に出て、或る私立学校に這はい入つた。お蝶が東京に出たのは、佐野さんの跡を慕つて来たのであつた。

佐野さんはその後も、度々川榊へお蝶に逢いに来て、一寸話しては歸つて行く。お客になつて来たことはない。お蝶の親元からも度々人が出て来る。婿取の話が矢張続いているらしい。婿は機屋と取引上の関係のある男で、それをことわつては、機屋で困るような事情があるらしい。佐野さんは、初めはお蝶をなだめすか賺すようにしてあしらつている様子であつたが、段々深くお蝶に同情して来て、後にはお蝶と一しよになつて、機屋一家に対してどうしようか、どうしようかと相談をする立場になつたらしい。

こう云う入り組んだ事情のある女を、そのまま使つていると云うことは、川榊ではこれまでついぞなかつた。それを目をねむつて使つていには、わけがある。一つはお蝶がひどくお上さんの気に入つている為めである。田舎から出た娘のようではなく、何事にも好く気が附いて、好く立ち働くので、お蝶はお客の褒めものになつている。国から来た親類

には、随分やかましい事を言われる様子で、お蝶はいつも神妙に俯向いて話を聞いていても、その人を帰した跡では、直ぐ何事もなかったように弾力を回復して、元氣よく立ち働く。そしてその口の周囲には微笑の影さえ漂っている。一体お蝶は主人に間違ったことで小言を言われても、友達に意地悪くいじめられても、その時は困ったような様子で、謹んで聞いているが、直ぐ跡で機嫌を直して働く。そして例の微笑んでいる。それが決して人を馬鹿にしたような微笑ではない。伶俐で何もかも分かつて、それで堪忍して、おこるの怨むのと云うこととはしないと云う微笑である。「あの、笑鬚よりは、口の端の処に、豎にちよいとした皺が寄って、それが本当に可哀うございましたの」と、お金が云った。僕はその時リオナルドオ・ダア・中子のかいたモンナ・リザの画を思い出した。お客に褒められ、友達の折合も好い、愛敬のあるお蝶が、この内のお上さんに気に入っているのは無理もない。

今一つ川柳でお蝶に非難を言うことの出来ないわけがある。それは外の女中がいろいろの口実を拵えて暇を貰うのに、お蝶は一晩も外泊をしないばかりでなく、昼間も休んだことがない。佐野さんが来るのを傍輩がかれこれ云つても、これも生帳面に素話をして帰るに極まっている。どんな約束をしているか、どう云う中か分からないが、みだらな振

舞をしないから、不行跡だと云うことは出来ない。これもお蝶の信用を固うする本になっているのである。

お金は宵に大分遅くなつてから、佐野さんが来たのを知っている。外の女中も知っている。こんな事はこれまでもあつたが、女中達が先きに寝て、暫く立つてから目が醒めて見れば、いつもお蝶はちゃんと来て寝ていたのである。それが今夜は二時を過ぎたかと思うのに、まだ床に戻つていない。何と云う理由わけもなく、お金はそれが直ぐに気になつた。どうも色になつている二人が逢つて話をしているのだと云う感じではなくて、何か変つた事でもありはしないかと氣遣われるような感じがしたのである。

* * *

お花はお松の跡に附いて、「お松さん、そんなに急がないで下さいよ」と云いながら、一しよに梯子段を降りて、例の狭い、長い廊下に掛かった。

二階から差している明りは廊下へ曲る角までしか届かない。それから先きは便所の前に、一燭しよくばかりの電灯が一つ附いているだけである。それが遠い、遠い向うにちよんぼり見え

ていて、却かえつてそれが見えるために、途中の暗黒が暗黒として感ぜられるようである。心理学者が「闇その物が見える」と云う場合に似た感じである。

「こわいわねえ」と、お花は自分の足の指が、先きに立って歩いているお松の踵かかとに障るよ
うに、食つ附いて歩きながら云った。

「笑しょうだん談 お言いでない。」お松も実は余り心丈夫でもなかったが、半分は意地で強そう
な返事をした。

二階では稀まれに一しきり強い風が吹き渡る時、その音が聞えるばかりであったが、下に降
りて見ると、その間にも絶えず庭の木立の戦そよぐ音や、どこかの開き戸の蝶ちようつがい番の弛ゆるんだ
のが、風にあおられて鳴る音がする。その間に一種特別な、ひゆうひゆうと、微かすかに長く
引くような音がする。どこかの戸の隙間から風が吹き込む音でもあるだろうか。その断
えては続く工合が、譬たとえば人がゆっくり息をするようである。

「お松さん。ちよいとお待ちよ。」お花はお松の袖を控えて、自分は足を止めた。

「なんだねえ。出し抜けに袖にぶら下がるのなもの。わたしびっくりしたわ。」お松もこ
うは云ったが、足を止めた。

「あの、ひゆうひゆうと云うのはなんででしょう。」

「そうさねえ。梯子を降りた時から聞えてるわねえ。どこかここいらの隙間から風が吹き込むのだけわ。」

二人は暫く耳を敬そぼだてて聞いていた。そしてお松がこう云った。「なんでもあんまり遠いところじゃなくつてよ。それに板の隙間では、あんな音はしまいと思うわ。なんでも障子の紙かなんかの破れた処から吹き込むようだねえ。あの手水場ちようずばの高い処にある小窓の障子かも知れないわ。表の手水場のは硝子戸ガラスだけれども、裏のは紙障子だけわね。」

「そうでしょうか。いやあねえ。わたしもう手水なんか我慢して、二階へ帰って寝ようかしら。」

「馬鹿な事をお言いでない。わたしそんなお附合いなんか御免だわ。帰りたけりやあ、花ちゃんひとりでお帰り。」

「ひとりではこわいから、そんなら一しよに行つてよ。」

二人は又歩き出した。一足歩くごとに、ひゅうひゅうと云う音が心持近くなるようである。障子の穴に当たる風の音だろうとは、二人共思っているが、なんとなく変な音だと云う感じが底にあつて、それがいつまでも消えない。

お花は息を屏つめてお松の跡に附いて歩いているが、頭に血が昇つて、自分の耳の中でい

ろいろな音がする。それでいて、ひゆうひゆうと云う音だけは矢張際立つて聞えるのである。お松も余り好い気持はしない。お花が陽にお松を力にしているように、お松も陰にはお花を力にしているのである。

便所が段々近くなつて、電灯の小さい明りの照し出す範囲が段々広くなつて来るのがせめてもの頼みである。

二人はとうとう四畳半の処まで来た。右手の壁は腰の辺から硝子戸になっているので、^{はじめ}始て外が見えた。石灯籠の笠には雪が五六寸もあるうかと思う程積もつていて、竹は何本か雪に^{たわ}撓んで地に着きそうになっている。今立っている竹は雪が^お墮ちた跡で、はね上がったのであろう。雪はもう降っていないかつた。

二人は覚えず足を止めて、硝子戸の外を見て、それから顔を見合わせた。二人共相手の顔がひどく青いと思つた。電灯が小さいので、雪明りに負けているからである。

ひゆうひゆうと云う音は、この時これまでになく近く聞えている。

「それ御覧なさい。あの音は手水場でしているのだわ。」お松はこう云つたが、自分の声が不断と變つているのに気が附いて、それと同時にぞつと寒けがした。

お花はこわくて物が言えないのか、黙つて^{がってん}合点々々をした。

二人は急いで用を足してしまった。そして前に便所に這入る前に立ち留まった処へ出て来ると、お松が又立ち留まって、こう云った。

「手水場の障子は破れていなかったのねえ。」

「そう。わたし見なかったわ。それどこじゃないのですもの。さあ、こんなところにいないで、早く行きましょう。」お花の声は震えている。

「まあ、ちよいとお待ちよ。どうも変だわ。あの音をお聞き。手水場の中よりか、矢つ張この方が近く聞えるわ。わたしきつとこの四畳半の障子だと思ふの。ちよつと開けて見ようじゃないか。」お松はこん度常の声が出たので、自分ながら気強く思った。

「あら。およしなさいよ。」お花は慌あわてて、又お松の袖にしがみ附いた。

お松は袖を攫つかまえられながら、じつと耳を澄まして聞いている。直き傍そばのように聞えるかと思うと、又そうでないようにもある。慥たしかに四畳半の中だと思われる時もあるが、又どうかすると便所の方角のようにも聞える。どうも聞き定めることが出来ない。

僕にお金が話す時、「どうしても方角がすっかり分からなかったと云うのが不思議じゃありませんか」と云ったが、僕は格別不思議にも思わない。聴くと云うことは空間的感覺ではないからである。それを強しいて空間的感覺にしようと思うと、ミュンステルベルヒの

ように内耳の迷路で方角を聞き定めるなどと云う無理な議論も出るのである。

お松は少し依怙地えこじになつたのと、内々はお花のいるのを力にしているのとで、表面だけは強そうに見せている。

「わたし開けてよ」と云いさま、攫まえられた袖を払って、障子をさつと開けた。

廊下の硝子障子から差し込む雪明りで、微かではあるが、薄暗い廊下に慣れた目には、何もかも輪郭だけはつきり知れる。一目室内を見込むや否や、お松もお花も一しよに声を立てた。

お花はそのまま気絶したのを、お松は棄てて置いて、廊下をばたばたと母屋おもやの方へ駆け出した。

* * *

川柳の内では一人も残らず起きて、廊下の隅々の電灯まで附けて、主人と隠居とが大勢のもの騒ぐのを制しながら、四畳半に来て見た。直ぐに使を出したので、医師が来る。巡査が来る。続いて刑事係が来る。警察署長が来る。気絶しているお花を隣あきまの明間へ抱え

て行く。狭い、長い廊下に人が押し合つて、がやがやと罵るののし。非常な混雑であつた。

四畳半には鋭利な刃物で、気管を横に切られたお蝶が、まだ息が絶えずに倒れていた。ひゆうひゆうと云うのは、切られた気管の疵きずぐち口から呼吸をする音であつた。お蝶の傍そばには、佐野さんが自分の頸くびを深くえぐつた、白鞆しらさやの短刀の柄つかを握つて死んでいた。頸動けいどうみや脈くが断たれて、血おびただが夥しく出ている。火鉢の火には灰が掛けて埋めてある。電灯には血の痕あとが附いている。佐野さんがお蝶の吭のどを切つてから、明りを消して置いて、自分が死んだのだらうと、刑事係が云つた。佐野さんの手で書いて連署した遺書が床の間に置いてあつて、その上に佐野さんの銀時計が文鎮にしてあつた。お蝶の名だけはお蝶が自筆で書いている。文面の概略はこうである。「今年の暮に機屋一家は破産しそうである。それはお蝶が親の詞ことばに背そむいたためである。お蝶が死んだら、債権者も過酷な手段は取るまい。佐野も東京には出て見たが、神経衰弱の為に、学業の成績は面白くなく、それに親戚から長く学費を給してくれる見込みもないから、お蝶が切に願うに任せて、自分は甘んじて犠牲になる。」書いてある事は、ざつとこんな筋であつたそうだ。

川柳へ行く客には、お金が一人も残さず話すのだから、この話を知っている人は世間に沢山あるだらう。事によると、もう何かに書いて出した人があるかも知れない。

青空文庫情報

底本：「森鷗外集 新潮日本文学」 新潮社

1971（昭和46）年8月12日発行

入力：柿澤早苗

校正：湯地光弘

1999年10月16日公開

2006年4月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心中

森鷗外

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>